国　　語

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

令和３年度大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は，平成25年度入学生から実施された高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）を踏まえた試験であった。指導要領では，総合的な言語能力を育成する「国語総合」を共通必履修科目とし，高等学校「国語」において指導する内容の共通性を重視している。

共通テストでは，指導要領において育成を目指す資質・能力を踏まえ，知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっており，言語を手掛かりとしながら，文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり，目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求めることとなっている。

高等学校「国語」教科担当としての立場から，本年度の試験問題を検討した。検討を加える観点として次の点を設定した。

・　問題内容は適切であったか。
・　知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め，バランスのとれた問題であったか。
・　指導要領に定める範囲内での出題であったか。
・　出題内容に極端な偏りはなく適切であったか。
・　試験時間に照らして適切な分量であったか。
・　設問数・文字数などは適切な量であったか。
・　問題の難易度は適切であったか。
・　学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており，教科・科目の本質に照らし適切であったか。
・　設問形式や配点は適切であったか。
・　文章表現・用語は適正であったか。

以上の観点に立ち，「内容・範囲」「分量・程度」「表現・形式」の面から，第１問～第４問それぞれに検討を加えて，評価し意見を述べる。

２　内　容・範　囲

第１問　フィクションとしての「妖怪」が，どのような歴史的背景のもとで生まれたのかを通史的に論じた文章である。妖怪に対する認識の変容が時系列で整理されており，論の展開がわかりやすく，また抽象的な概念も多く用いられているため，論理的思考力や文章読解力を確認する上で適切な素材文であった。

問１　漢字・熟語についての基本的な知識・技能を問うている。

問２　「民間伝承としての妖怪」がどのようなものか，［３］段落の文脈を的確に読み取る力を問うている。

問３　本文において，筆者が考えを構築するための分析方法「アルケオロジー」の内容がどのようなものか，［６］～［９］段落の文脈をとらえ，語句に注意して読み取る力を問うている。

問４　11 ～ 14 段落の文脈から「人間」と「記号」との関係についての変容を理解し，そこから「表象」という抽象的な概念について的確に読み取る力を問うている。

問５　(i)　本文の内容をノートにまとめるＮさんの活動の追体験を通して，文章を要約する力，またそれぞれの段落が文章全体においてどのような役割をもつのかをとらえる力を問うている。

(ii)　妖怪がどのような存在であったかということについて，本文で述べられている近世から近代にかけての変化を的確に読み取り要約する力を問うている。

(iii)　別添の資料である『歯車』の一節に描かれている「ドッペルゲンガー」と，本文で述べられている近代の「私」とを関連させて考察する思考力を問うている。

第２問　タイトルにもある「羽織と時計」を中心として，W君の好意に感謝をしつつも重い圧迫を感じてしまう「私」の心情を描いた文章である。大正時代に発表された文章ではあるが，人物の内面についての記述が丁寧に描写されており，心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問１　本文の読解に必要な語句の意味についての基本的な知識・技能を問うている。

問２　「私」の「擽られるような思」がどのような心情なのかについて，「私」と妻との会話のやりとりを根拠に心情を的確に読み取る力を問うている。

問３　傍線部直前の「常に或る重い圧迫」を根拠に，「私」がW君に対して感謝と重苦しさを同時に抱くという複雑な感情を，文脈から的確に読み取る力を問うている。

問４　「私」がW君よりもその妻君の眼を恐れる理由について，傍線部の前後に書かれている内容を的確に読み取る力を問うている。

問５　傍線部直後に書かれている「実はその折……為めであった」の部分を根拠に，「私」の行動の理由について，場面を適切にとらえる力を問うている。

問６　(i)　本文の批評にあたる資料を示し，その批評文が言わんとしていることを的確に読み取る力を問うており，作品を多角的に解釈する姿勢を求めている。

(ii)　批評文の評者とは異なる視点から本文の表現について評価する力を問うており，他の文章と比較し論じる姿勢を求めている。

第３問　平安時代の歴史物語『栄花物語』からの出題。妻に先立たれた藤原長家が，和歌を交えながらその悲しさを表現する場面である。敬語を含め，古文特有の語句も多く用いられており，さらに和歌も数首含まれている。古文を的確に読み取る力，またその内容の豊かさを理解する力を確認する上で適切な素材文であった。

問１　本文の読解に必要な基本的な単語・敬語・文法の知識を問うている。

問２　傍線部直前の「よろし」という語句の意味や，そののちに進内侍と贈答歌を交わしている文脈を根拠として，本文全体を総合的に読み取る力を問うている。

問３　傍線部を含む本文の最後の段落に書かれている内容について，語句を根拠とし，その文脈を的確に読み取る力を問うている。

問４　登場人物の言動や和歌の内容を正しく整理し，本文全体を総合的に読み取る力を問うている。

問５　本文と同じ状況で詠まれた別の和歌を『千載和歌集』から引用し，三首それぞれの和歌を適切に解釈する力を問うている。また，本文単体の読み取りに終始せず，他の資料と比較することで多角的に解釈し，読解を深めていく姿勢を求めている。

第４問　『欧陽文忠公集』から「有馬示徐無黨」という五言古詩，そして『韓非子』の一節からの出題。いずれも馬車を操縦する「御術」について書かれたものである。漢文に用いられる基

本的な句法，および総合的な読解力を確認する上で適切な素材文であった。

問１　漢文特有の語についての基本的な知識を問うている。

問２　基本的な句法や漢字の読みについての知識を活用して，本文の語句の意味を適切に解釈する力を問うている。

問３　漢詩に用いられる押韻に関する基本的な知識を問うとともに，異なる文章を活用して本文の内容を適切に解釈する力を問うている。

問４　本文の読解に必要な返り点の付け方と書き下し文についての知識・技能を問うている。また漢詩の文脈を的確に読み取る力もあわせて問うている。

問５　傍線部内に含まれる漢文の基本的な句法や語句の解釈を根拠とし，前後の文脈とあわせて本文を的確に読み取る力を問うている。

問６　「御術」について書かれた二つの文章について多角的に解釈し，それぞれの内容を的確に読み取る力を問うている。

３　分　量・程　度

⑴　設問数について

制限時間80分に対して大問は４問で，大問ごとの設問数は第１問と第３問で各５問ずつ，第２問と第４問で各６問ずつであった。全体の解答数は38で，適切であった。

（昨年度のセンター試験：大問ごとの設問数は各６問ずつ。全体の解答数は35。）

⑵　難易度について

第１問は，本文及び設問中の【ノート】とも，高等学校の授業で扱う文章レベルとして妥当であった。設問は，指導要領や生徒の学習の過程を意識した場面設定を踏まえており，難易度としては適切であった。

第２問は，本文の場面設定や設問中の【資料】が大正時代のものであったが，基本的な読解力を判定する上で，文章量は適切であった。問６のように，本文に関係する資料から情報を得て，多角的な視点から解釈する力を判定する設問もあり，難易度として適切であった。

第３問は，本文及び設問中の【文章】を合わせて，文章量は適切であった。単に文法事項を問うことなく，敬語を含めた基本単語の知識を活用して解釈したり，関連する【文章】を踏まえて考えたりする設問があり，古文の学習成果を見る難易度としては適切であった。

第４問は，漢詩と文章のほか，挿絵を加えた出題で文章量は適切であった。異なる種類の文章を組合せた複数の題材から考える設問も含め，基本的な知識の定着など漢文の学習成果を見る難易度としては適切であった。

全体的に，難易度は適切であった。

４　表　現・形　式

第１問

〔問５〕本文を授業で読んだ生徒が，文章の構成や展開についてノートに整理し，さらに出典の別の部分に注目して書かれている内容を考察し，素材文の理解をより深めるという学習場面が設定されており，このことは問題作成方針に合致したものであり，適切である。

リード文において「内容をよく理解するために」という用語を使用していることで，目的意識をもった学習活動であることが明示され，日頃の学習活動を踏まえたものであったと考えられる。また，配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

第２問

〔問６〕本文が発表された当時の新聞紙上に掲載された批評文を資料として，文章を批評する学習場面が設定されており，問題作成方針に合致している。

(ii)では本文中の表現の「繰り返しに注目し，評者とは異なる見解を提示した内容」を選べ，という表現を用いて，受験者の思考力・判断力・表現力等を測る工夫が見られた。

また，配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

第３問

〔問５〕贈答歌を取り上げ，本文と同一の状況でありながら，本文とは異なる返歌が詠まれている別の出典を取り上げて，二つの返歌の表現や内容の違いを中心に考察する設定の問題で，授業で生徒が学習する場面を意識しており，問題作成方針に合致している。

表現や用語も受験者の混乱を招くものはなく，適正であった。また，配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

第４問

〔問３〕〔問６〕「御術」を話題にした，漢詩と文章を素材文として取り上げ，漢詩の押韻や「御術」に必要なことについて考えさせる形式の問題となっている。文章の内容を踏まえて漢詩の理解を深める授業場面を想定した問題であり，問題作成方針に合致している。

表現や用語も受験者の混乱を招くものはなく，適正であった。〔問６〕の配点は９点と国語の全ての問題で最も高かったが，難易度はさほど高くなく，解答に時間を要する問題ではないため，もう少し低い得点設定でも良かったと思われる。

難易度がさほど高くないことと解答に要する時間とのバランスを考えると，配点の設定の妥当性について，今後検討していただきたい。

５　ま　と　め（総括的な評価）

従前実施のセンター試験「国語」において出題されてきた良問の蓄積を基盤とし，知識の理解の質を問う問題や，思考力，判断力，表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視するとの共通テスト問題作成方針に則した良問が出題されたことを評価する。今後，高等学校での学習を通して受験者が身に付けた力を評価するのに妥当な問題が作成され，また，生徒の言語能力を育成する高等学校国語科の授業づくりに資することを期待して，意見・要望を以下に示す。

⑴　「国語総合」の枠の中で指導要領に沿った問題作成がなされていた。学習者による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設問が大問ごとに出題されており，言語活動の過程を踏まえた場面や複数の題材を統合して考察する場面の設定により，平素の学習活動を通して身に付けた力を評価することのできる設問となっている点は評価される。

⑵　いずれの大問においても，本文が比較的平易で適量であり，時間内でテクストの細部を検討したり全体の要旨を把握したりして読み，設問の意図を捉えて選択肢を吟味することが可能であったと思われる。本文と関連付けて考察することを求める【資料】や【文章】も量，難易度とも適切であった。次年度以降も同様の配慮により，受験者が十分に思考し，判断する時間が確保されることを求めたい。

⑶　共通テストにおいては，生徒が「どのように学ぶか」を重視していることが十分に感じられるものであった。ねらいを明確にした言語活動の設定，批評文や同一の状況で詠まれた異なる和歌の提示にみられる教材の工夫，提示されたテクストの異同に着目して内容を考察する学習課題など，授業改善の視点から大いに示唆に富むものであった。このような出題が国語科における授業改善を促し，生徒の言語能力の育成に資するよう今後とも工夫を凝らした出題がなされることを期待する。

第２　教育研究団体の意見・評価

○　日本国語教育学会

（代表者　桑原　隆　　会員数　約3,000人）
ＴＥＬ　03-6801-5951

１　前　　文

⑴　現代文分野

評論は，文章量・論理展開・言葉の定義など，バランスがよく問題として適切である。ただし，国語総合としてはやや難しかった。小説は，発表年の古さによって受験者との距離が生じた題材であった。そのため，注も多くなってしまっており，状況をふまえた読解が難しかったと思われる。大学入試センター試験の傾向と「同じところ」と「異なるところ」が示され，国語の授業のあり方について考えさせ，教育の現場につながる問題であったと感じた。

⑵　古典分野

古文と漢文の問題の方向性が違いすぎる。語句問題で古文は応用的な力が問われているが，漢文は基本的な知識確認にとどまる。読解問題も古文は文法と読解をからめた問題があったが，漢文は句法を単純に問う問題と，難易度が大きく異なる。今後は方向性のバランスをとっていく必要があると思われる。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第１問　実用的な文章・図表との比較なども予想されたが，例年通りとも言える評論文だった。ただし，学習者のノートや他の文章との比較など，新しい傾向は示されている。選びぬかれた素材・問題であると感じた。

問１　従来の５択が４択になっている意図がわからない。難易度を下げるためだろうか。

㈠「公序良俗」㈤「援用」は語彙として難しめ。

問２　問うべき問題。誤答である根拠が単語のレベルでわかるようになっており，他の問題でもそのような誤答が目立った。

問３　リード文・本文における言葉の定義をおさえる問題であり，適切。時間はかかるものの，選択肢の正誤がわかりやすく，迷うことはない。

問４　本文中の変化の理解を問う問題であり，適切。❺がやや紛らわしい。消去法などの受験のためのテクニックで解くことになる。

問５　新しい傾向の問題。知識・技能だけではなく，思考・判断・表現の力を共通テストに組み入れようとした問題か。リード文も丁寧で良い。実際の学習場面を想像させる。新しい学びの力にもつながっている。特にノート３では，評論と文学的な文章が合わさっており，今後の「文学国語」「論理国語」の扱いにも関係するだろう。空欄Ｖの内容を記述で書くように問われたら，おそらくこの答えにはならない。また，生徒が自主的に作るノート，という設定にも無理があると感じた。工夫すべきところである。新しい問いのかたちとしての意欲を感じ，実際の学習の現場にもつながる問題であった。

第２問　注の丁寧な読み取りを求められる問題だった。

問１　難しくはないが，㈤は現在ではあまり使わない言い回しである。

問２　解きやすかった。文章が古いぶん，解きやすくしているのだろうか。

問３　誤答の外し方が目立つ問題。正答には納得するが，やや抽象度が高い選択肢であった。

問４　問うべき問題。文学的な文章の問題としてはオーソドックスだが，正答が言い尽くしていない。誤答が明確なので，消去法で解くことになる。

問５　流れをつかんで答える問題。箇所として適切。授業であれば，いろいろな解釈が出てくところだが，単純化している（問題としてやむをえない）。❸は省略がある文章（～できれば）になっており，選択肢として不適。❹の文末が他の選択肢とまとめ方が異なる。

問６　新しい問題。批判的な文章を示し，読みの多様性を示しており面白い。しかし，第一問と比べると学習者の設定があるわけでもなく，中途半端。批判的な文章と，さらにそれとは異なる見解という問題の意図が見えにくく，問題のための問題になってはいないか。また，この同時代評は適切な批評なのか。読み比べや解釈の多様性など，実際の授業にもつながる問題ではあったが，課題も残る。

第３問　人物関係図がすっきりとまとまっていてわかりやすい。千載和歌集との比較の問題は読解を深めていくという意味では適切。文章量は適切，一文の長さ，内容のテーマも典型的な古文だった。心情展開が乏しいので，和歌を通して心情を追いかけていくのはやや難しい。

問１　㈦㈧基本単語から文脈に応じて意味を考える応用的な問題。今後古文読解における単語力を高校生に対してどこまで求めるか。㈠は標準的な問題。

問２　「よろし」の解釈が難しい。受験者にとって「よろし」は「悪くない」とポジティブに捉えることが多いと思われる。問１㈦と同じでどこまで高校生に単語力を求めるか。

問３　文法と内容理解をからめた問題。読解のために文法力を問うという姿勢はよい。

問４　平易な問題だが問うべき問い。もう少し難易度を上げるならば，登場人物が多いので，正解を複数にしてもよかった。

問５　資料を示し読解を深めていく問題で新傾向だが，配点が高すぎるのではないか。

第４問　文章は適切なレベル。ただ，この二つの文章を比較読みさせる必然性や関係性が薄いのではないか。

問１　漢文語句問題として標準レベルの問題。

問２　難易度は古文と比べると易しく，配点を考えると古文の語句問題との難易度のバランスをもう少し考えてもよいのではないか（古文語句問題が難しい）。⑵現代語に通じる語彙力という意味では良い問題。

問３　妥当な問い。二つの文章を用いているのでこの問は必要。

問４　これからの言語文化を考えていくときに，漢文の白文を読む能力を求めていくことが適切か。白文を書き下す問題は一考の余地があると思われる。

問５　対句をきちんと見れば難しくない。良問。

問６　問うべき問い。正解選択肢のまとめ方も妥当。

第３　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　言語を手掛かりとしながら，文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり，目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章，文学的な文章，実用的な文章），古典（古文，漢文）といった題材を対象とし，言語活動の過程を重視する。問題の作成に当たっては，大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく，異なる種類や分野の文章などを組み合わせた，複数の題材による問題を含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問　問題文として香川雅信『江戸の妖怪革命』（角川文庫，2015年６月）の「序章　妖怪のアルケオロジーの試み」より，一部抜粋（約3,319字）した。フィクションとしての「妖怪」が，どのような歴史的背景のもとで生まれたのかを通史的に概略を論じた内容である。フーコーの「アルケオロジー的方法」を援用した観点により，中世・近世・近代と妖怪観の変容が時系列に整理されている。中世までは，人間にとって了解不能な事象を意味の体系のなかに回収するための文化装置が「妖怪」であったが，近世中期以降，「妖怪」が，キャラクターとして「表象」された。近代に入ると，人間の不安定な「内面」を投影した存在として再びリアリティを獲得していくと論じている。問１は漢字の読み書き，問２～４は本文の読解に関する問題である。問５は，生徒がノートをまとめる言語活動形式による問題とした。(ⅰ)は本文の構成に表題を付ける問題，(ⅱ)は本文のキーワードを補う問題，(ⅲ)は「私」という不可知の「内面」を抱え込んでしまった近代人の妖怪観について，本文では抽象的にまとめられているため，同書の第四章に出てくる芥川龍之介「歯車」のドッペルゲンガーに関する引用部をあげ，この事例を本文の観点にしたがって解釈する問題とした。

第２問　加能作次郎「羽織と時計」（『新潮』1918年12月）は，W君の訃報に接した「私」が巡らせる思惟を中心にして展開する短編小説で，出題箇所は作品の中盤部分，W君と「私」とが同じ出版社に勤務していた頃の回想を中心にした場面である。偶然の好意や恩恵によって，はからずも窮地に立たされる「私」が，自らその呪縛に捕らわれ続けていくさまが，密度の高い描写によって描かれる。加えて，同時代の書評記事を設問内の副題材として用いた。各問の正答率はおおむね成績層に相関しており，受験者の基礎的な読解力を識別できる問題であった。問１は，基本的な語句について，文脈を踏まえた文中の意味を問う問題である。(ｱ)(ｲ)の正答率がやや高くなったが，これは出題の方式に起因する課題とも考えられる。問２は，妻との関わりにおける「私」の心情を解釈する力を問う問題である。正答率は高かったが，導入的な設問としては妥当であろう。問３では，表現上の特色を踏まえた上で，文章の展開を支える「私」の認識を捉える力を問うた。「羽織」「時計」といったモチーフが持つ時代的な意味に受験者が戸惑った可能性もある。問４は，W君の妻に対する「私」の心情の変化を捉える力を問う問題である。問５は，他登場人物との関係をめぐる「私」の意識のあり方を総合的に問う問題である。問６では，目的に応じて必要な情報を関連付け，文章の趣旨と表現の特色とを把握する力を問うた。異なる観点から導かれる小説についての多様な評価を示すことも狙いのひとつであり，作品を批判的に捉えた副問題文の理解を問う(ⅰ)の正答率はやや低かったが，想定した範囲には収まったと考えている。

第３問　問題文は，『栄花物語』巻二十七「ころものたま」より，万寿二年（一〇二五）八月，藤

原長家の妻が急逝した後に続く場面から取った。法住寺に亡骸が移され，悲嘆に暮れる長家のもとに幾通もの弔辞が届けられる。一方で，この悲しみもいずれ薄らぐかもしれないと思う気持ちもあり，そのことが長家には情けなく感じられる。痛切な心情が描かれているが，平安時代の標準的な和文であり，単語・文法ともにさほど難しいものはなく，受験者の基本的な学力を問うことができる文章である。問５で異なる文章（218字）を用いたため，『栄花物語』自体の分量は，近年のセンター試験と比べるとやや少なめの約930字となった。問１は語句解釈の問題で，古文に特有の単語の意味と語法が正しく理解できているかを問うた。いずれも平易であったと思われる。問２は長家の心情を問う問題だったが，直前の文脈を正確に理解して解く必要があり，難度は比較的高かったようである。問３は文法・単語に関する知識を，文脈理解のために活用できているかを問う問題とした。さまざまな知識を活用して解く複合的な問いであったために，難度は上がったと思われる。問４では，文脈をおさえてそれぞれの人物についての情報を正しく読み取れているかを問うた。問５は，本文中の贈答歌が，『千載和歌集』では異なる組合せとなっていることを利用して，異なるテクストの情報を活用しつつ深い文脈理解ができているかを問う問題としたが，難易度は適正であった。

第４問　欧陽脩の五言古詩と『韓非子』の複数の素材文を題材とした。両素材文には「御術」の心得というテーマが通底しており，欧陽脩（【問題文Ⅰ】）は名馬を見分けられる者（伯楽）より，名馬を自在に乗りこなせる者（王良）の方が優れていると指摘。『韓非子』（【問題文Ⅱ】）は，王良が馬を御する心のありようの大切さを語ったものである。本文の字数は，両素材文を合わせて176字。これまでのセンター試験では，問題文は200字前後としてきた。今回は複数題材であることを考慮し，少ない分量とするように心がけた。問１と問２は，基礎的な学力である漢字の意味や文脈における解釈を問う問題。問３は【問題文Ⅰ】と【問題文Ⅱ】に共通する御術の要点を問う問題である。問４は，漢文の返り点の付け方とその書き下し文を問う基礎的な問題。問５は，文脈における解釈を問う問題。問６は【問題文Ⅰ】と【問題文Ⅱ】を踏まえた内容の要点を問う問題である。複数題材として初めての出題であったが，解答結果を見れば，各設問の正答率は標準的な数値で，識別力もおおむね高かった。共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

３　出題に対する反響・意見等についての見解

第１問　文章量・論理展開・言葉の定義を問う問題など，設問や配点のバランスは適切で，論理的思考力や文章読解力を確認する上でも適切で，おおむね指導要領や日頃の学習活動の実態を踏まえた設問がなされたと評価された。問５については学習場面を想定した問題だった。自主的にノートを作成するという設定は目的意識をもった学習活動を想定しており適切であると評価された一方，生徒が自主的にノートを作るという設定には無理があるとのコメントもあった。こうした設問については今後さらに工夫していくことが必要である。

第２問　問題文の古さについて若干の懸念も示されたが，人物の内面が丁寧に描写されており，心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切との評価を受けた。問１について㈼が現代的な語彙からやや外れているという指摘があったが，語句の文脈上の意味を問う設問について，設問形式による制限があることは事実で，今後工夫や改善が求められよう。問２，問３については，難度についての指摘はあったが，複雑な心情を的確に読み取る力を問う設問として評価された。問４については，正答の抽象度の高さに関する指摘もあったが，正答を選ぶ根拠の明確さを評価する声があった。問５には，総合的な読解の確かさを問うに適切な設問であったとの高い評価があった。問６については，他の文章と比較し論じ

ることを含め，作品を多角的に解釈する姿勢を求め，授業改善にもつながる設問であったと評価される一方で，副問題文の提示意図のわかりにくさについて指摘もあった。

第３問　難易度，文章量，配点ともに適切であり，共通テストの問題作成方針に沿った問題であるとの評価をいただいた。問１は「本文の読解に必要な基本的な単語・敬語・文法の知識を問うている」，問２は単語を根拠としつつ「本文の読解に必要な基本的な単語・敬語・文法の知識を問うている」，問３は「読解のために文法力を問うという姿勢はよい」，問４は「登場人物の言動や和歌の内容を正しく整理し，本文全体を総合的に読み取る力を問うている」，問５は三首の和歌の適切な解釈とともに，「他の資料と比較することで多角的に解釈し，読解を深めていく姿勢を求めている」と評価された。問題文の選択，出題の意図・内容・形式について高い評価をいただいたものと理解している。今後も受験者の学習の成果が的確に測れるような題材の選定と出題を心がけたい。

第４問　問題文・文章量・設問ともにおおむね肯定的な評価をいただいた。一方，二つの文章を比較読みさせる必然性や関係性が薄いのではないかという指摘もあった。これについては，【文章Ⅰ】が【文章Ⅱ】を教養として知っている作者によって書かれたものであり，前提となる資料を踏まえながら正確に文章を読解することが重要であると考えての複数題材であった。問３・問６は複数題材を考えさせる設問であり，「文章の内容を踏まえて漢詩の理解を深める授業場面を想定した問題であり，問題作成方針に合致している」と評価していただけたことは幸いであった。題材の単数・複数に拘わらず，今後も設問の難易度や配点などバランスの良い設問を検討していきたい。

４　ま　と　め

第１問　指導要領で多様な文章を生徒に読ませることが目指されていること，また，言語活動を重視し，思考力・判断力・表現力等に結び付く学習が目指されていることなどを配慮した設問を工夫していくことが求められる。とくに後者については，今後も高校での学習過程を踏まえつつ，どのような能力を測るのかということに注意を払いながら，問う内容と問い方を工夫していくことが必要である。

第２問　おおむね適切な出題だったと言える。副題材を含む問題文の古さを懸念する声もあったが，基本的な読解力を判定する上で，内容，文章量ともに適切と評価された。複数の素材文使用については，国語の授業のあり方について考えさせ，教育の現場につながるとの高い評価を得た。この点について，受験者から見たわかりやすさについて課題を指摘する声もあったが，試験によって問いたい力やその難度も併せ考慮しながら，今後検討を続けていくべきだろう。

第３問　問題文のテーマ・難易度・文章量など，いずれも適正であったと判断される。文法・敬語・単語などの知識を活用しつつ，文脈を踏まえて考える設問や，資料を提示して比較しながら本文の読みを深めてゆく設問など，古文の学習成果を見るための問題として適切なものであった。今後も，このたびの成果を踏まえて，生徒が「どう学ぶか」ということを意識しながら，内容や問い方について工夫を重ねてゆくことが必要である。

第４問　漢文問題は，問題文の分量と注及び設問のバランスを調整することで，受験者が取り組みやすいように努めた。今後も問題文を吟味し，設問の難易度に留意した上で，知識と思考力をバランス良く問えるような出題を検討してゆくことが求められよう。